

詩 追憶のカイロ

とよださんから「私はいつも家で待っているばかりではなかったよ」と言われました。慣れないカイロでの暮らしの中で、多くの主婦たちは不安感からか、あまり外出して見聞を広めようとせず日本人同士で集まり、家では夫の帰宅を待っていました。ところが先日、とよださんは、夫の勧めもあって取材の現場に立ち会うことが多かったと話してくれました。だからこそ、先月、お届けした「シナイ半島へ」に綴られた取材同行も、思いの深い散文詩に乗せて語ることができたのだと、改めて感激しています。この貴重な機会に日本人の女性参加者はとよださん一人だけ、まさに貴重な目撃者となったのです。

今月は、とよださんえさんの詩集から「二人のムスタッファ」をご紹介します。この詩には「顔」とあだ名されるムスタッファと「背中」と呼ばれるムスタッファと、同じ名前だが対照的な二人のムスタッファの存在が、中東を覆う複雑な空気感とともに描かれています。「顔」のムスタッファさんは当時の NHK カイロ総局の運転手でもあり雑用係でもあったのですが、詩の中に描かれている「毎晩、小さなホテルのコンシェルジュをしていた」とされるそのホテルで私の夫は独身時代にお世話になり、私共家族が幼い子供たちを伴って赴任した際にも、住まいが見つかるまでそこに滞在していました。「顔」のムスタッファさんは、多くの子供を抱える大家族の長として家計を維持するために、その古いペンションで夜勤をしていました。寡黙で元ボクサーだけあって力持ちで、宿泊客の無理難題の要求にいやな顔一つしないで、次々と応えていました。とよださんご一家だけでなく、若い日本人の学生たちにとっても、寡黙だが丁寧に要求に応えてくれる「顔」の存在は、慣れない異国の生活を支えてくれる命綱でもありました。

数年を経て、とよださんご一家が帰国した後に、何度目かのカイロ行きが決まった私はとよださんに依頼されて、「顔」のムスタッファさんに会って、この詩の一部を翻訳してあげました。「顔」は恥ずかしそうに何も言わず、ちょっとだけ笑顔になりました。それからしばらくして、「顔」のムスタッファさんの訃報に接しました。

本誌で8ページに及ぶ長い詩を、次ページから縦書きで掲載します。

(塩尻和子)